種子島「慈遠寺」考

三浦成雄

法華宗における薩南三島（種子島・屋久島・口永良部島）開教の祖、定源院日典（義賛坊林応）が修学した種子島「慈遠寺」は、「種子島家譜」、「三國名勝図会」、「懐中島記」、「両山暦譜写書継稿」等によって、大同四年（八〇九）、奈良法相宗興福寺の末寺として建立され、同寺の鎮守社の春日社は、律令時代に奈良春日社より勧請されたものと伝えられている。(1) 住職は十恵・貞源・瑜光・円林の五代の名がみえ、当時の領主の帰依を得て、種子・屋久・口永良部の三島を支配していた。その外、種子島には慈遠寺を本寺とする赤尾木「妙法寺」（応永三十二年草創）、西面村「徳満寺」（応永年間貞源草創）、納官村「妙昌寺」（草創不詳）、油久村「本隆寺」（草創不詳）、茎永村「遠妙寺」（草創不詳）、「善林寺」（草創不詳）等が存在していた。(2)

定源院日典が南都遊学の帰途、堺顕本寺日浄と法論、尼崎本興寺に日隆聖人を訪ね帰伏したのが宝徳三年（一四五一）、本興寺勧学院で法華本門八品の教義を研鑽すること十年、故郷種子島に布教を志し寛正二年（一四六一）渡島、しかし領主時代を始め種子島家の怒りをかい、同四年四月二十一日、石子詰めの難に遭い殉教の師となったのである。その後同六年（一四六五）、勧学院において師弟の契りを交した浄光院日良が渡島、領主種子島時氏を改宗せしめた。(3) 「懐中島記」に、

一、三島（種子屋久恵良部）法華一宗帰状之事

文正応仁年間島主十一代時氏代

とあり、文正応仁年間（一四六六～六八）に三島が法華宗に改められた事が知られる。改宗直後の文明元年（一

四六九)、「本源寺」が建立され、慈遠寺は長享二年(一四八八)に領主の祈願所となり、住持喜道(幡時の弟)が改宗を拒否、遷化した延徳二年(一四九〇)法華宗に改宗している。

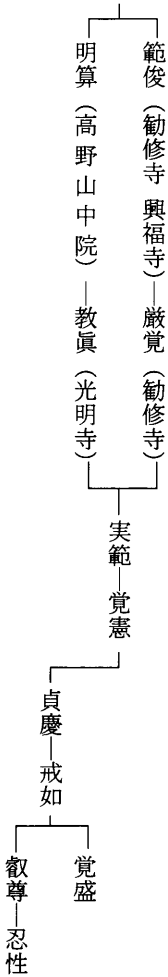
このように、従来の記録伝承によって、奈良興福寺律宗の配下にある慈遠寺として今日まで伝えられてきた。

此度、奈良西大寺の諸國末寺記録(4)「西大寺坊々寄宿諸末寺帳」(永享八年。西大寺二聖院常住物)「西大寺諸國末寺帳」(明徳二年九月二十八日旧改之了)「西大寺諸國末寺帳」(寛永拾年三月七日)「西大寺諸國末寺」、「西大寺諸國末寺帳」の中に、種子島「慈音寺」の名が見える事から、慈遠寺と慈音寺、種子島と西大寺律宗との関わりについて考察したい。

一、南都西大寺の復興

中世において南都仏教の展開をみるとき、その戒律系譜は、道昌(七九八〜八七五)による三論宗の密教化、広隆寺や法輪寺の建立、又真興(九四三〜一〇〇四)は法相と真言の和合を通して顕密一致の立場を確立し、実範(〜一一四四)を戒律復興の出発点として位置づけている。

それは鑑眞から承安七年(八四〇)の豊安、更に聖宝までは律儀は継承されたが、その後衰退の一途をたどり、実範により復興され、覚憲—貞慶と継承され、鎌倉期に至り叡尊によって、奈良期の学問的仏教としての律宗とは異った、密教と律とを併せた「西大寺律宗」として登場をみるのである。(5)



——静誉(勧修寺 随心院流祖)

西大寺は天平宝字八年（七六四）称徳天皇の発願により奈良末期に完成したが、七大寺（東大寺・興福寺・大安寺・薬師寺・元興寺・西大寺・法隆寺）の中でもその教勢は振わず、七大寺僧法会参加数(6)、七大寺への施入等(7)も少なく、寺領(8)も有名無実の所が多く、顚到の場所も多く存在している。

第５表　西大寺の寺領

	780年段階	1191年段階
大和	高市郡加隆庄園	(△)
	宇陀郡挑鳴庄	(△)
	宇太郡耳良村栗林	
	〃　茅原江	
	添下郡瑜伽山寺	×
	〃　阿弥陀山寺	×
	〃　秋篠山寺	×
山城	相楽郡泉木屋	
	葛野郡葛野池	
摂津	嶋下郡穂積村	
	豊嶋郡佐伯村	(×)
河内	更占郡渚濱庄	
伊賀	名張郡栗林	(×)
	〃　杣	
近江	滋賀郡保良庄	△
	栗太郡勢多庄	×
	甲可郡椋部栗林	×
	滋賀郡古津庄	×
	〃　椋部庄田	
	野洲郡柴井庄	×
	甲可郡杣	×
	〃　緑道杣	×
播磨	印南郡庄	
	赤穂郡塩山	
美作	大庭郡田地	
安芸	安芸郡牛田庄	(×)
讃岐	寒川郡塩山	(×)
	多田郡田地	
阿波	板野郡庄	(×)
丹波	船坂杣	
備前	大豆田庄	(△)
武蔵	入間郡櫟原庄	
越前	坂井郡子見庄	
	〃　高見庄	
	〃　赤江庄	(×)
	〃　馬立綾部	
	〃　牛立庄	
	江沼郡本堀庄	
越中	射水郡櫟山庄	(×)
	〃　中野庄	
	〃　佐味庄	
越後	頸城郡桜井庄	(×)
	〃　津村庄	
	蒲原郡鵜橋庄	
	〃　槐田庄	
	高志郡三枝庄	
飛騨	大野郡田地	(×)

註　△は有名無実、×は顚倒をさす。ただし（　）の×・△は、一部が有名無実・顚倒していると思われることを示す。

（中世の南部仏教）

第３表　七大寺僧法会参加数の変化　（　）は推定

年代＼寺	東大	興福	大安	薬師	元興	西大	法隆	延暦	東	西
798	10	10	10	10	10	10	10			
884						25				
901	72	70	20	20	20	20	20			
960	40	40	25	40	25	15	15	60	20	20
994	300	300	60	80	80	40	40			
1003	100	100								
1003	50	40	30	30	30	10	10			
1010	20	20	10	10	10	10	10			
1021	100	200	20	30	15	5	5	600	20	5
1096	(10)	(10)	(10)	(10)	(10)	(10)	(10)	60		
1097	20	20	10	10	10	10	10			
1107	10	(10)	(10)	(10)	(10)	(10)	(10)			
1169		100	30	30	30	30	30	100		
1183	4	8	1	1	1	1	1	8	1	1
1185	300	500	30	100	15	40	40			
1195	318	487	11	44	21	13	13	14	5	8

（中世の南部仏教）

第４表　七大寺への施入

西暦	施入物	内　訳（寺院毎）	出　典
863	新銭 1000貫文 （修理料）	100貫…東大・興福・元興・大安・薬師・西大 30貫…延暦・新薬師 20貫…豊浦・本元興・招提・天王・崇福・知識 15貫…梵釈・比叡西塔・東・西	三代実録
886	新　銭 （大般若経転読供料）	5貫…東大・元興・興福・薬師・延暦 4貫…西大・法華・大安 3貫…法隆	三代実録
926	布六千端 （誦経施料）	1000端…東大・興福・元興・大安・薬師 500端…西大・法隆	扶桑略記
934	布 （誦経施料）	500端…東大・興福・大安・薬師・延暦 400貫…西大・法隆・東・西・極楽	貞信公記
961	調　布 （諷誦施料）	200端…興福・東大・延暦 100端…西大・法隆・薬師・大安・元興・東・西	扶桑略記

（中世の南部仏教）

この西大寺を復興し隆盛に導いたのが叡尊である。叡尊は興福寺系の、修験道的素養の強い僧であったと云われ、父慶玄は興福寺の学僧であったが、七歳にして父を亡くし、八歳の時醍醐寺西大道小阪御子の家に預けられ、更に十一歳より養母の妹弥座一御子の家に預けられた。その養君が醍醐寺の叡賢である。

叡尊は三十五歳にして西大寺に入るが、それ迄の二十七年間は醍醐寺所属の僧として過した。平安末期より鎌倉初期にかけて、興福寺醍醐寺共に修験者による交流がみられる。

二十四歳の折り、高野山に於て真言、念仏を、二十五歳東大寺中門南辺で護摩修行、又峰の寺（近江）、長岳寺で真言の秘伝をうけ、二十八歳で具支灌頂を受けている。この長岳寺は興福寺の末寺で、興福寺流修験道とのかかわりを持つ寺である。その外、太子信仰、観音信仰、龍神信仰（弁財天信仰）、光明真言信仰、文珠信仰等を身につけていった。

こうして叡尊は、西大寺に入る頃から、加持祈祷に専念する僧達の、菩提心の欠如によって陥る魔道について、「戒」の必要性を自覚するようになり、戒を通して密教を深める、所謂真言律宗の基礎を開いたのである(9)。

更に叡尊は、光明真言を通して西大寺興隆の要因とし、上級貴族、上級武士、僧侶に加えて守護、地頭、名主等の中間層や庶民層にまで、多くの民衆を引きつけ、非人の救済にも力を尽した。

慈善事業については、文珠、太子、行基の三者を一体に位置づけて教義的根拠とした。救済の斉戒施行は八二〇〇人（四十四歳迄千人、光明真言導入後七二〇〇人）に及んだ。

それまで西大寺については安元元年の記録(10)では、法燈の消えない寺は東大寺、興福寺、薬師寺の三ヶ寺と記され、叡尊が西大寺復興直前では、西大寺と大安寺は衰滅状態で、天福二年（一二三四）の記録(11)には、仏法が衰微していないのは東大寺と興福寺だけであると記されている。

叡尊の西大寺復興は暦仁元年（一二三八）からと云われているが、当時の伽藍は四王堂、食堂、塔しかなく、荒廃していた。叡尊は鎮護国家寺院としての機能を回復し、強固なものとするために、四王堂を中心にした三時秘法を通して密教秘法による祈祷寺院としてその特性を発揮、伽藍の復興をすすめ、僧堂、真言堂、僧堂厨、仏殿、護摩堂、宝生護國院、沙弥堂、文珠堂を建立再建した。教義は「尊内持密教、外興律宗、旁渉唯議」と云われている。

叡尊の弟子忍性（一二〇一～一三〇三）は、三十七歳で出家したが、それ以前は信貴山で密教の加持祈祷を、額安寺で浄土信仰や太子信仰を、安部寺では、文珠信仰を、竹林寺では行基信仰を学ぶ等、修験者的な要素が強い。

叡尊が西大寺の復興を始めた暦仁元年（一二三八）頃、西大寺の復興を手伝う形で参加している。

忍性は学僧ではなく、師の叡尊の戒律関係の経典講義の聴講や、授戒の行為を通して戒律の知識や実践の重要性を身につけたと云われている。又これまでに身につけた文珠信仰等を核とした庶民信仰を通して西大寺の復興につとめている。

叡尊が東国鎌倉への下向は、弘長二年（一二六二）二月から八月にかけて行われたが、その特徴として、街道の合流地を宿に選び、遊女、芸能民、商工民、非人が多く集まる場所を選び、新興の商工民や宿泊施設を有する寺院等にも積極的に近づき、又、「儲茶」や「太子信仰」を通じて多くの帰依をうけている。

忍性が東国に下向したのは建長四年（一二五二）で、その理由を「学生記」に

「君性良観房発無正法所興隆仏法利益衆生之願　下向関東畢　生年三十六歳」

と記されている。(12)

叡尊が北条時頼に招聘されて下向したのに対し、忍性は北条重時との関係が深い。重時は弘長元年（一二六一）に没したが、忍性はそれまで常陸の清涼院と極楽寺の住職を兼ね、常陸と相模とを往来していたが、重時の七回忌

に当たる文永四年（一二六七）極楽寺に永住することになった。回國行を志し、勧進聖としての行動が忍性の西大寺を離れる理由として考えられる。

二、西大寺律宗の伸張と慈遠寺

叡尊や忍性による西大寺流律宗の関東下向は、北条幕府と密接な関係を確立し、幕府の外護を得て教線を拡張、忍性は極楽寺を根拠として活躍した。

文永八年（一二七一）六月に行われた鎌倉稲村ヶ崎での祈雨に当っては、日蓮聖人より痛烈な批判をあびている。(13) その外にも忍性批判の遺文(14)が残されている。

文永五年（一二六八）一月一日、蒙古の国書が届けられた。翌六年四月再び使者が返書を求めて筑前今津に着いた。

このように蒙古襲来の危機に直面した幕府は、その防備を確立する必要に迫られ、北条一門による警備態勢を急いだ。

そもそも九州は、頼朝の弟範頼が太宰府の政務を処理していたが、その後家臣の土肥実平が継ぎ、文治二年（一一八六）天野遠景が鎌倉から鎮西奉行として派遣され、政治機関は鎌倉幕府の指揮をうけることになった。建久六年（一一九五）天野遠景が武藤資頼に代わり、鎮西奉行となり、更に嘉禄二年（一二二六）太宰府少弐の兼任となり、筑前、筑後、肥前と対馬の守護職ともなった(15)。九州に向けての警備は、物資の海上輸送の必要も生じ、瀬戸内海上交通の整備も行われた。

叡尊と忍性はこの機に乗じて、西大寺律宗の伸張を計ったと思われる。南北朝期迄、形成された末寺の範囲は、北は出羽國（山形・秋田）から、南は薩摩・大隅（鹿児島）まで二百五十余ヶ寺に及んでいる。

茲で瀬戸内・九州地域の末寺名を挙げると四十三ヶ寺にのぼる。

播　磨—常楽寺（北条）、成福寺（ヲノヘ）、福泉寺、曼荼羅寺（サタニ）興喜寺、報恩寺（二堂）、龍華寺（長坂）、銚万寺、延命寺、常住寺、福泉寺、長坂寺、報恩寺（平）

備　中—善養寺（成羽）、金光寺、菩提寺（備中カルエ）

備　後—浄土寺（尾道）、常福寺（クサイツ、草出）金剛寺（今高野・大田庄）

周　防—浄宝寺（トンタ）、國分寺

長　門—國分寺、律成寺、浄名寺（コトウ）藏福寺、長光寺

讃　岐—鷲峰寺（柏原）、普賢寺（屋島寺）國分寺

伊　豫—興法寺、國分寺

豊　前—大興善寺、大楽寺

豊　後—金剛宝戒寺、永興寺

筑　前—大乗寺、神宮寺、最福寺

肥　前—東妙寺

肥　後—浄光寺

日　向—宝満寺

大　隅—正福寺

種子島—慈音寺

右、諸國末寺帳記録に記載の内、尾道浄土寺は叡尊の没後、西国に赴いた定証が、嘉元四年（一三〇六）に建立、

本尊は大和長谷寺の観音像・福山明王院は元常福寺と呼ばれ、貞和四年（一三八四）の建立。又周防、長門、讃岐、伊豫の國分寺が再興されているが、これが蒙古襲来から南北朝期にかけて、国分寺の国家祈祷の機能が朝廷や幕府から見直され、西大寺律宗にゆだねられたものであると考えられる(16)。

ここで北条幕府と海上交通との結びつきを示す資料として、日向の宝満寺を挙げることができる。

宝満寺は日向志布志に在り、正和五年（一三一六）鎌倉極楽寺忍性の弟子信仙の建立によるもので、沙弥蓮聖が「日向方島律後庄志布志津」の宝満寺の敷地を宝満寺に寄附した記録があり、この地は薩摩、大隅、日向にまたがる地で、北条重時の家系守時に伝領されていたが、宝満寺が守時の帰依を得ていたことから、この地を信仙に贈ったと思われる。(17)

〇二六〇一一　日向蓮正寺敷地打渡状案

〇薩藩舊記前編巻十一　寶満寺文書

奉打渡

日向方嶋津御庄志布志津大澤水寶滿寺敷地四至境事

限東深小路大道

限南經峰

限西河

限北天神山後堀

右、任被仰下之旨奉打渡于寶滿寺狀如件

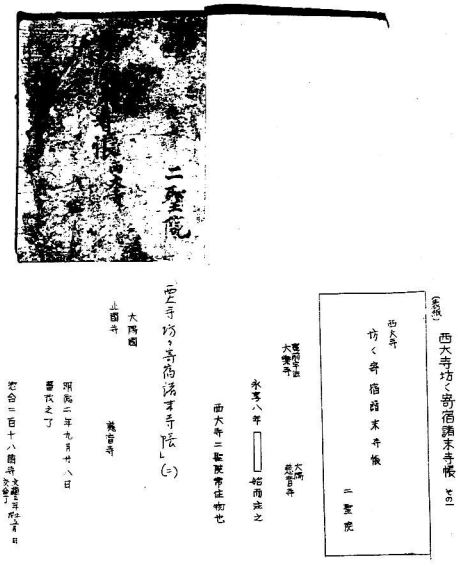
正和五年十一月三日　　沙彌蓮正在判

この沙弥蓮聖は、北条氏の各所領に、代官や領主になると共に海上交通を把握していた安東蓮聖と想像される。

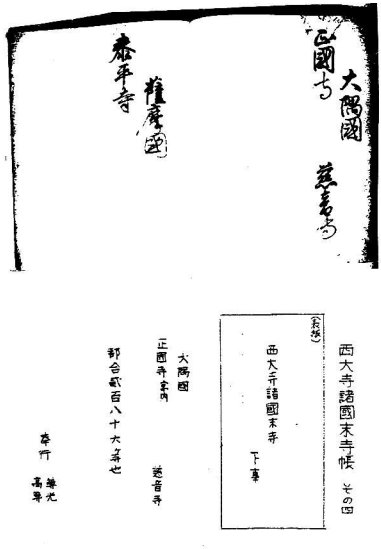
「西大寺文書」明徳二年（一三九一）九月二十八日「西大寺諸國末寺帳」に西大寺の大隅國の末寺として正國寺と慈音寺の二ヶ寺の名が記されている。

同じく永享八年（一四三六）「西大寺坊々寄宿諸末寺帳」にも西大寺第十八也長老沙門深泉（明徳二年四月九日～応永二年九月二十五日）の時に慈音寺光瑜房の名前が見える。

この慈音寺が慈遠寺と同じであることは、当時の種子島に存在する寺院として、慈音寺以外に律宗寺院が存在しない事から断定できると考える。



6「西大寺坊々寄宿諸末寺帳」（一）



「西大寺諸國末寺」（四）

鎌倉期の種子島は、島津庄大隅の一部で、この地の地頭島津忠久は建久三年（一二〇三）九月の比企能連の乱に連座したため、大隅日向の地頭職を北条時政に譲られ、それ以後義時、その次男名越朝時、時章に伝えられ、名越の代官肥後次郎入道浄心が種子島を支配し、この肥後氏が室町期以降戦国期へと種子島を支配した種子島家である。[19]

このように種子島も志布志と同じように北条一門の支配下にあり、北条、名越、肥後の影響下にあり、ここに慈音寺の西大寺末寺化の確立が考えられる。

西大寺律宗の特徴は、修験道的要素が強く、熊野の修験道信仰が種子島に流入している。忍性が最初に関東に下向したのは寛元元年（一二四三）であるが、この時忍性は下向の途次、吉野聖の一行に出合い、修験道に接している。その年に忍性は鎌倉をあとにするがその帰途にも再び吉野の修験道の聖と遭い、その修法を会得した。金峰山を中心に回国している修験聖との出合いは、「吉野の執行」と伝えられている。西大寺律宗の中に取り入れられた修験道は、瀬戸内海路の充実と共に種子島にもたらされたのである。

この事から、興福寺の末寺として在った慈音寺が歴代十恵の代に、西大寺の末寺に代ったと考えられる。つまり十恵より園林までの五代が西大寺律宗の時代であったと云うことができるのである。

種子島の島民にとって、今迄経験したことのない呪術的な修験道信仰は種子島家にも影響を与え、第十代幡時等は熱心な修験道信仰者となり、毎年熊野詣でをする程であった。

幡時　自蚤才行天健之法　崇信紀州熊野権現而毎年詣焉[21]。

又、享徳元年（一四五二）には熊野より分霊を勧請し、油久村に祠った。中種子の熊野神社がそれである。

一方種子島には熊野信仰と前後して、吉野と熊野とが結びついた大峰修験道の松浦党があり、瀬戸内海上交通の

利権の争いの中で流入し、これが種子島氏家督相続の争いを生み、表面化するのである。

松浦党の遠藤頼堅は、修験道よって島主時充に接近、家督の相続を約されていた、又太郎を暗殺、その後頼堅は家老職に補されている。

○九七八　禰寝清種申状案　○薩藩書記十九所收池端文書

大隅國禰寝彌次郎清種謹言上、

欲早被經嚴蓋御沙汰、預安堵御成敗當國多禰嶋内見和村名主職事、

副進

一通　大將家御下文

一通　守護嶋津判官忠久施行

一通　手継状雖有散逸自餘略之

一通　系圖

右、於見和村者、養父佐多孫四郎親政重代相傳地也、爰名越尾張左近大夫代肥後次郎入道浮心、以關東權威令押量彼村於理不盡、持于五郎兵衛入道之條、希代所行也、隨而擬令言上之刻、世上動亂之間、于今令延引處、幸奉仰嚴政御代、欲經上訴折節、彼五郎兵衛入道依令同意于御敵、被誅伐訖、然早帶大將家御下文并忠久施行以下證文等、清種相傳之上者、被經急遽御沙汰、爲預安堵御裁許、粗言上如件、

建武四年六月　日

○二三一六　散位某施行状　○肥前橘中村文書

橘薩摩一族等代景連申、大隅國種島地頭職事、重申状具書如此、子細見状、早停止楡井四郎・肥後中務丞等押領、任建武三年四月七日御下文・施行状、沙汰付彼輩於下地、執進請取状、載起請詞、可被注申之状、依仰執達如件、

貞和三年三月廿八日　　散位（花押）

壮歳寝疾厚。自覚不免。約属家統於同氏又太郎（号所殿信式六男信貞之子信家之二男也）後得癒而生一子。頼時是也。於爰時充悔約以謂殺又太郎伝家統頼時。招家臣密議。皆不可。暦応康永間　有自肥前国平戸来善眩術（俗云放下）挙人見之為奇怪。時充聞之召見其術数回　其後平戸商船来。其船長　従舟子数輩　行装殊美　往来赤尾木市街。偶遇眩術者　於途敬待之甚厚矣。時充自本城遥望見之（本城時充之居城）　怪其礼厚船長而問其故。曰

彼松浦党一族遠藤源三頼堅者也。少年殺害朋友。以幼稚故宥其罪追放国中。故巡回諸国也。時充召頼堅与禄以為臣　且以国上村大内侍女妻之。於是時充以謂頼堅羈旅臣而無旧　好於又太郎令彼殺之。密召頼堅而告之。即応命而捧誓書。又以大内侍女次女妻又太郎近習岩坪高山五郎友重　為姻姫。於是相与謀貞和二年三月十八日　講射於御坊（在慈遠寺上）又太郎置酒肴酔之後害之。時充賞之、賜頼堅野間村重平山村　以家老職。

又、第八代島主となる清時が時栄（時充）に寵愛されていた盛純を殺害したかどで譴責を受けたが、遠藤頼堅の手助けで薩隅に身をかくしていた。

永徳年間　野辺左衛門尉盛純「時年十八　叔母嫁野辺氏所生」来謁時栄寵之太甚。群臣憎之。或讒清時曰世人言。時栄窃有分封境与盛純命。清時信之大怒謀遂手刃盛純於城浜。時栄大怒令清時速自殺譴責太急。清時匿遠藤氏。遠藤窃使下村出羽守時豊従清時乗扁舟夜更去。時栄雖遍求不知其所在。

清時　経歴薩隅之間六年而帰。時栄宿怨漸解親愛之[23]。

このように、種子島家の家督をめぐる熊野党と松浦党の争いは、修験道信仰を内収した西大寺律宗信仰の中で、種子島家が両派に分かれ、抗争が続いたのである。

その中で、第八代島主清時の五男で、大会寺の住職喜道は、第八代島主幡時が熊野詣での際、日向細島留に滞在の折、黒木某の女との間に生まれていた三郎二郎を後嗣として迎える事を提案したのである。この三郎二郎が第十一代島主の時氏である[24]。

幡時　自蚤才行天建之法、崇信紀州熊野権現而毎年詣焉。毎寄船於日州細島津留滞之際、通黒木某之女生男子。三郎二郎是也。大会寺喜道（時氏叔父）憂幡時無嗣子、議招三郎二郎令嗣世於群臣。半可半不可。

寛正三年壬午八月幡時卒。時氏嗣家。時年十六。対馬守時里（時氏叔父）心懐不平欲破衆議。然喜道補佐之、且群臣多通心於時氏。由是時里不果、遂従衆議。各唱万歳。

寛正三年（一四六二）、幡時が没し、十六才の時氏が島主となっている。

義賛坊林応（定源院日典）が西大寺に遊学したのは文安三年（一四四六）四十五歳、種子島へ帰ったのは十五年後の事であった。

註

(1)吉井敏幸『元興寺文化財研究』＝元興寺文化財研究所通信　No.四十九号

(2)吉井敏幸『元興寺文化財研究』＝元興寺文化財研究所通信　No.四十九号

(3)『法華宗宗門史』（宗門史編集委員会編）一七〇頁

(4)元興寺文化財研究所主任研究員吉井敏幸氏より、『西大寺諸末寺帳』の中に種子島慈音寺の名前があると、との資料を頂いた。

(5)追塩千尋『中世の南都仏教』（吉川弘文館）八六頁

(6)追塩千尋『中世の南都仏教』（吉川弘文館）一一四頁
(7)追塩千尋『中世の南都仏教』（吉川弘文館）一一七頁
(8)追塩千尋『中世の南都仏教』（吉川弘文館）一二九頁
(9)和島芳男『叡尊・忍性』一五頁以下
(10)追塩千尋『中世の南都仏教』（吉川弘文館）一三一頁
(11)追塩千尋『中世の南都仏教』（吉川弘文館）一二七頁
(12)追塩千尋『中世の南都仏教』（吉川弘文館）三〇一頁
(13)日蓮聖人遺文『頼基陳状』（昭定一三五四頁）
(14)日蓮聖人遺文『行敏訴状御会通』（昭定）四九七頁。『開目抄』（昭定）五九二頁。『種子御振舞御書』（昭定）九七七頁。『兵衛志殿御返事』（昭定）一四〇五頁～一四〇六頁
(15)田中政喜『元寇物語』二〇頁
(16)朝日新聞社『國宝と歴史の旅』一二号
(17)吉井敏幸『元興寺文化財研究』＝元興寺文化財研究所通信　No.五〇号
(18)『鎌倉遺文』三四巻九州編一巻
(19)『南北朝遺文』三四巻九州編二巻
(20)『南北朝遺文』三四巻九州編二巻
(21)『種子島家譜』一巻一一頁
(22)宮脇さゆり「中世種子島における法華宗について」（隼人文化）二六号

(23) 宮脇さゆり「中世種子島における法華宗について」（隼人文化）二六号
(24) 宮脇さゆり「中世種子島における法華宗について」（隼人文化）二六号

参考文献

「法華宗宗門史」宗門史編纂委員会編
「中世の南都仏教」追塩千尋著　吉川弘文館
「叡尊・忍性」和島芳男著　吉川弘文館
「元寇物語」田中政喜著　青雲書房
「近代の西大寺と真言律宗」―宗派の独立とその後―真言律宗独立認可百周年記念誌編纂委員会
「種子島家譜」上妻隆直編纂
「懐中島記」上妻隆直
「隼人文化」二十六号
「元興寺文化財研究」四十九号
「元興寺文化財研究」五十号
「わたしたちの種子島」西之表市教育委員会・西之表市文化財保護審議会編
「三國名勝図絵」南日本出版文化協会
「國宝と歴史の旅」十二号　朝日新聞社

西大寺諸末寺記録

（A）一、西大寺坊々寄宿諸末寺帳（永享八年　始而注之）（西大寺二聖院常住物也）

（B）二、西大寺諸國末寺帳（明徳二年九月二十八日舊改之了）

（惣合二百十八箇寺文亀三年任戌五月　日交合了）

（C）三、西大寺諸國末寺帳（寛永拾年三月七日）（右之末寺之内無違乱御座候）

（D）四、西大寺諸國末寺（都合貳百八十六ヶ寺也）

（E）五、西大寺諸國末寺帳

大和國

般若寺（ABCDE）元興寺極楽坊（ABCDE）観音寺（AB　D）大善寺（A　　）

常満寺（A　　）来迎寺（AB　D）海龍王寺（ABCDE）三寶院（AB　D）

蒲索院（AB　D）圓福寺（AB　D）神宮寺（AB　D）大日寺（AB　D）

秋篠寺（AB　　）不退寺（ABCD）惣持寺（AB　D）仙澗寺（AB　D）

敬田寺（AB　D）極楽寺（AB　D）大御輪寺（ABCDE）三鈷寺（AB　D）

日毫寺（ABCDE）阿弥陀寺（AB　D）長安寺（AB　D）福田寺（AB　D）

東大寺中知足寺（AB　D）大安寺（B　D）喜光寺（BCDE）額安寺（BCDE）

最福寺（B　　）現光寺（BCDE）神願寺（B　D）三学院（B　D）

小塔院（BCDE）高福寺（BD）常楽寺（BD）神宮如法院（BD）

迎攝寺（BD）如意林寺（BD）八木寺（BD）勝福寺（BDE）

寿福寺（BD）大善寺（BD）竹林寺（BCDE）不空院（CDE）

福智院（CDE）圓證院（CDE）文珠院（CDE）橘寺（CDE）

本光明寺（CDE）北室寺（C）淨願寺（C）中宮寺（C）

佛隆寺（D）菩提寺（D）法隆寺北室（D）大聖無動寺（D）

淨住寺（D）蓮成院寺（D）大乘院（D）大覚寺（D）

放生院（D）長福寺（DE）法光明院（D）常福寺（D）

寿福寺（D）桂宮院（D）遍照心院（D）戒光寺（D）

成心院（D）平等心王院（D）貴山寺（E）長命寺（E）

山城國

観音寺（ABD）菩提寺（ABDE）茲遠寺（A）石津寺（A）

連成就院（ABCDE）寿福寺（ABD）法光明院（ABD）放生院（ABD）

淨住寺（BD）大乘院（BCD）大覚寺（BD）知足院（B）

長福寺（BD）常福寺（BD）本幡観音寺（B）桂宮寺（BDE）

遍照院（B）遍照心院（CDE）土生寺（C）極楽坊（D）

戒光寺（D）成心院（D）平等心王院（D）橘寺（D）

壬生寺（E）大乘院（E）平等院（E）

河内國

寶蓮華寺（ABCDE）眞福寺（ABD）西方寺（ABD）神弘寺（ABD）

三鈷寺（A　）寶泉寺（ABD）教興寺（ABCDE）金剛蓮華寺（ABD）

西琳寺（ABCDE）千光寺（ABD）寛弘寺（A　）廣成寺（BD）

泉福寺（BD）筧弘寺（BD）薬林寺（BD）

和泉國

菩提寺（A　）禅寂寺（ABD）来迎院（ABD）長承寺（ABD）

清弘寺（B　）淨弘寺（D）

摂津國

安楽寺（A　）多田院（ABCDE）慈光寺（ABD）安養寺（ABD）

能福寺（ABD）観音寺（ABD）荘厳寺（ABCDE）東光寺（ABD）

天王寺薬師院（BDE）妙壹寺（BD）極楽院（BD）吉祥寺（BD）

法薗寺（BD）安楽寺（BD）

伊賀國

長福寺（ABD）阿弥陀寺（ABD）大岡寺（ABD）良福寺（ABD）

大聖寺（ABD）長福寺（A　）七佛薬師院（ABD）妙覚寺（AD）

長楽寺（BD）報恩寺（BCD）無量寿福寺（BCDE）地蔵堂（BCE）

不動寺（BCE）

伊勢國

常光寺（A）法薗寺（A）醫王寺（A）大日寺（ABD）

資生院（A）保延寺（A）岡輪寺（A）弘正寺（ABCDE）

興光寺（ABD）長妙寺（ABD）利生護國寺（A）寶生院（B）

圓明寺（A）寶寿寺（BD）寶生院（C）戒泉（B）

圓光寺（B）常泉寺（B）福善寺（BD）法延寺（B）

金光寺（B）大福田寺（BCDE）慈忍寺（B）戒泉寺（A）

東観音寺（B）新福寺（B）常光寺（C）圓興寺（C）

近江國

寶蓮院（BD）慈恩寺（BD）石津寺（BD）福泉寺（BD）

長安寺（BD）法薗寺（BD）常福寺（BD）阿弥陀寺（BCDE）

尾張國

釈迦寺（ABD）圓満寺（ABD）安國寺（ABD）圓光寺（B）

金勝寺（BD）阿弥陀寺（B）國分寺（B）

美濃國

松藏寺（ABD）長康寺（ABD）小松寺（BD）報恩寺（BD）

信濃國

盛興寺（BD）山善寺（BD）

越前國

長悳寺（A）神宮護國寺（ABD）大善寺（BD）長福寺（BD）

加賀國

月輪寺（ABD）寶光寺（ABD）明星寺（ABD）西光寺（BD）

神宮寺（BD）称名寺（BD）國分寺（D）

越中國

弘正寺（ABD）圓福寺（ABD）聖林寺（ABD）禅興寺（BD）

寶薗寺（BD）大慈院（BD）國分寺（D）善養寺（D）

金光寺（D）菩提寺（D）

越後國

安禎寺（B）曼荼羅寺（B）

播磨國

延命寺（A）常住寺（AB）福泉寺（AB）報恩寺（A）

長坂寺（AB）長坂報恩寺（AB）E常楽寺（B）E成福寺（B）

曼荼羅寺（B）興善寺（B）二堂報恩寺（B）龍華寺（B）

餝万寺（AB）延命寺（B）福泉寺（B）平報恩寺（B）

備中國

金光寺（AB）善養寺（AB）

備後國

金剛寺（ABCD）淨土寺（BCDE）常福寺（BD）

周防國

國分寺（ABCDE）淨法寺（AC）淨寶寺（CD）安楽寺（C）

法華寺（C）長堂寺（C）長願寺（C）

長門國

律成寺（ABCDE）淨名寺（ABD）藏福寺（ABD）國分寺（BCDE）

長光寺（BD）善興寺（D）

丹後國

成願寺（AD）泉源寺（ABD）金光明寺（BD）國分寺（AD）

金光明寺（BD）

但馬國

常住金剛寺（ABD）花藏寺（BD）金剛心寺（ABD）

石見國

正法寺（ABD）

紀伊國

西福寺（ABD）寶金剛寺（ABD）遍照光院（ABD）岡輪寺（AB）

寶光寺（ABD）金剛寺（BD）利生護國寺（BCDE）福林寺（BDE）

観音寺（BD）光明院（B）妙楽寺（BD）岡林寺（D）

阿波國

光明寺（D）新別所（E）

高林寺（BD）成願寺（BD）観音寺（BD）地蔵寺（B）

讃岐國

鷲峰寺（ABD）普賢寺（BD）國分寺（BD）屋嶋寺（BD）

伊豫國

興法寺（BD）國分寺（BD）

筑前國

大乘寺（ABD）神宮寺（ABD）長福寺（ABD）最福寺（BD）

筑後國

安養寺（BD）

出雲國

大淋寺（A）浄土寺（BD）

豊前國

國分寺（A）報恩寺（BD）

寶勝寺（ABD）大楽寺（ABCDE）満福寺（A）大興善寺（BD）

寶光明寺（BD）常福寺（BD）坡ミヤコ観音寺（BD）中願寺（BD）

万福寺（BD）観音寺（BD）常福寺（A）

豊後國

最勝寺（ABD）永興寺（ABD）金剛賢戒寺（BCE）明音寺（B）

潮音寺（D）神宮寺（D）

肥前國

寶勝寺（A）東妙寺（ABCDE）法泉寺（BD）寶勝寺（B）

石塔院（C）妙法寺（C）寶勝寺（D）

肥後國

霊山寺（ABD）玉泉寺（ABD）正法寺（AB）浄光寺（ABD）

天福寺（BD）大琳寺（BD）春日寺（BD）金剛光明寺（BD）

観音寺（BD）

大隅國

慈音寺（AB）正國寺（ABCDE）

薩摩國

泰平寺（BD）

日向國

寶満寺（ABCDE）寶泉寺（BCD）法華寺（C）道明寺（C）

浄願寺（C）橘寺（C）中宮寺（C）

因幡國

國分寺（BD）

常陸國

平福寺（BD）

出羽國

長福寺（CE）長楽寺（CE）藏勝寺（CE）普賢寺（CE）

多門院（CE）法善院（CE）宗明院（CE）金藏院（CE）

千手院（CE）多福院（CE）密藏院（CE）正福院（CE）

菩提寺（D）

下総國

大慈恩寺（ABD）

下野國

眞福寺（B）要福寺（C）

相模國

極楽寺（ABCDE）

武蔵國

称名寺（CDE）海岸寺（C）常福寺（CDE）